

第27回 BIRD 脳科学セミナー

認知症モデルマウスの作製と 抗認知症薬の開発

演者: 梅田 知宙 先生

大阪市立大学大学院医学研究科 認知症病態学 助教

日時: 2021年1月12日(火) 16:30~18:00

オンライン (Zoom) 開催

アルツハイマー病 (AD)は、認知症を呈する進行性の神経変性疾患で、『アミロイドβ (Aβ)』と『タウ』という2種類の毒性タンパク質の蓄積が原因であることが知られているが、根本的な治療薬は存在しない。これまでに多くのAβ標的薬が臨床試験に入ったが、すべて失敗に終わっている。失敗の理由については、まず一つに、「候補薬の探索に用いられるモデル系がADモデルとして不完全である」ことが挙げられる。これまでAD研究のモデル系には、Aβ病理を呈するマウスモデルしか存在せず、タウ病理を再現できるものはなかった。これらAβ病理のみを示すマウスでスクリーニングされた薬剤が臨床試験へと進められてきたが、本来、タウの毒性への効果についても評価されるべきであった。理由の二つ目は、「Aβのみをターゲットとする治療戦略が不完全であった」ことにある。ADはAβとタウからなる多因子疾患であり、Aβの毒性はタウなしには発揮されないことが報告されている。Aβ蓄積は発症の20年以上前に開始しており、その後遅れて生じるタウ蓄積と神経細胞死こそが疾患の発症・進行に強く寄与する。AD治療には、Aβと同時に、タウの毒性を低減させることも必要であり、タウ毒性を抑制可能な薬剤の開発は急務である。私は以上2点の問題の解決を目指し、ADの発症機序を忠実に再現する真のモデル系の確立と、ADの新規治療法の開発研究を行っているので、紹介させていただきます。

本セミナーは学部生、大学院生の聴講も歓迎します

主催: 脳学際研究部門 (Brain Interdisciplinary Research Division)

東京理科大学における脳研究の学際的な連携基盤の構築を目指し2016年度に発足。
学内の理一・工一・基礎工・理工・薬学部・生命研および学外の研究機関から構成される。

世話人: 生命医科学研究所 中村岳史 (野 6140) tnakamr@rs.tus.ac.jp

本講演は公開セミナーです。聴講希望の方は世話人までメールでご連絡ください。
必要な情報を折り返しお伝えします

